










字形上の特徴を除けば、両表記の差異は次の2点に集約される。



①チベット文字が横書きであるのに対して、パスパ文字が縦書きであること。

②チベット文字が音節の切れ目を「▼」によって明示するのにに対して、パスパ文字では分かち書きによる空白によって示すこと。

問題の語「de·ere」{d·ere}において、「de」と「ere」の間に何らかの音が存在したとすれば、上の②の原則によって {de/·e/re} と3部分に分かち書きされたはずであるが、実際には2つの部分に分かたれているのみであるから、2音節であったと考えねばならない。そして第1音節「」{d·e}の部分がいかなる音を表しているかと言えば、チベット文字の表記法に照らして、長母音を伴った/de/を表したものと見るのが妥当である。

チベット文字では、梵語の短母音と長母音を区別するために次のような表記法を用いる。

da	dā	di	dī	du	dū
					

いずれも「ɑ」(パスパ文字の「」の基になった文字)を付すことによって長母音を表記したものである。パスパ文字に見られた「」{d·e}のごとき風変わりな表記がチベット文字における長母音の表記法を模倣したことは一目瞭然であろう。同様に「jaya·an」{j/y·n}は/jayān/と解釈される。すなわち/a/や/e/のような長母音は中期モンゴル語の段階から存在していたのである。以上は、初め Clauson&Yoshitake(1929)が指摘し、後に Ligeti(1961)が綿密な例証を加えて論じた所である。

### 3. パスパ文字「·()」の解釈----二重母音の場合

二重母音についてはどうであろうか。「'a·ula<山>」{'/·u/1}や「bö·esu<あるならば>」{beo/·e/su}における「-a·u」「-ö·e」を Poppe(1957)は二重母音ではなく、切れ目(hiatu)によって区切られた2つの母音と考え、服部(1939)は母音間に hiatus ないし弱摩擦音を想定した。Poppeの方は詳細な根拠を述べていないが、おそらく両氏とも同じ根拠に基づいていると思われるので、ここでは服部氏の説明を引用し、検討することにする。(「h」は本稿の「·」に相当する)

しかしながら八思巴文字の文献に見える h が何らの音も表わすものではないと断定し去れるかどうかは疑問であると思う。a-hu, e-hu, o-ha, o-he 等々が1音節をなさない、即ち二重母音でないことは確かである。何となれば、ハイフンで切った前後の部分が各々独立の正方形文字で表わされているに反し、二重母音は、

(hP'ags-pa Script)		(Mongolian Script)
ba-ri-tu-qayi	<取らしめよ>	barituyai
'ög-beè	<与えた>	ögbei
da <u>h</u> ul-qa-que	<布告する>	dayulyaxui
law	(「勞」のシナ音)	
mèw	(「廟」のシナ音)	

の ayi, eè, uè 等々のように、明らかに1音節をなすように表わされているからである。故に a-hu, e-hu などが少なくとも hiatus であるか、両母音の間に何らかの弱い子音があったものと見なければならぬ。

以上の説明は説得力がありそうに見えるが、個々の例を検証してみれば、必ずしも妥当とは言えない。パスパ文字モンゴル語に存在する正書法上の制限を考慮する必要があるのである。二重母音（あるいは母音連続）の表記は、主に以下の3種に分類できる。

(a) /ai/, /ei/, /ui/ etc. (パスパ文字ではそれぞれ「-ayi」「-eè」「-uè」 etc.)

(b) /au/ (「-a·u」)

(c) /öe/, /eü/ etc. (「-ö·e」「e·ü」 etc.)

(a)は連書されるものであり、(b)(c)は分かち書きされるものである。連書されるものは1音節と見なしてよいから、服部氏の説明に従ったとしても、(a)は二重母音と解釈されることになる。/ai/ (「-ayi」) に関しては、ローマ字転写だけを見ると、わざわざ「y」を記す必要がないように感じられるが、正書法上なくてはならないのである。パスパ文字においては、インド系文字に共通する特徴として、母音の/a/が明示されない。例えば/da/は実際には{d}のみによって表記される。もしも/dai/のつもりで{d}に直接{i}を連書すると、それは/di/としか読まれなくなってしまう。そのため{dyi}と連書することによって/dai/を表しているのである。この場合、{d}の後に母音記号が続いていないことによって/da/と解釈され、さらに{yi}が連書されることで、結果として/dai/と読むことが可能になる。/-ai/が二重母音であったため、分かち書きされずに連書されている。

同様の問題は(b)においても存在する。/au/は正書法上、連書できないのである。例えば「'a·ula<山>」「' /·u/1」において、「'a·u」を連書してしまうと、結果として/ula/と読まれてしまうことになる。つまり、分かち書きは音声上の理由からではなく、正書法上の理由からなされたわけである。したがって、分かち書きを根拠として二重母音でないと結論づけることは意味をなさない。Popeはこの語を、おそらくは分かち書きを根拠に、ダウル方言の/aüla/のような二重母音ではなかったと論じたが、正書法に対する正しい認識があったならば、あるいはダウル方言こそが（少なくともこの語に関しては）中期モンゴル語の音声を再現する材料としてふさわしいものと考えたかも知れない。

(b)の状況に照らせば、(c)においても、分かち書きされないのは音声的な理由ではなく、正書法上の問題なのではないかということ、まずは考慮してみるのが穏当であろう。私見によれば、(c)が連書されないのは、綴りが長くなりすぎるからである。つまり、「子音+二重母音」あるいは「子音+二重母音+子音」という1音節が一定数を超える文字で表記される時には、分かち書きする原則があったのではないかと考える。例えば、「bö·esu<あるならば>」において、「bö·e」{beo/·e}の部分は5文字から成っており、これを連書すると視覚的に煩雑になり読みにくい。他の用例を見ても、連書される限界は4文字までのようである。そして4文字の場合でも、文字の組み合わせによっては分かち書きされるものも多い。5文字は必ず分かち書きされる。以下、実例を見ながら確認してみたい。

3文字以内のもの。（全て連書。ただし上記(b)は例外。）

{bu·} /bua/ 「yabu·asu<行くならば>」 {y/bu·/su}

{qyi} /qai/ 「qaqai<猪>」 {q/qyi}

{beè} /bei/ 「bič'ibeè<書いた>」 {bi/č'i/beè}

4文字のもので連書されるもの。

{'euè} /üi/ 「'üiles<事>」 {'euè/les}

{h·en} /hen/ 「·ihe·en<保護>」 {·i/h·en}

4 文字で分かち書きされるもの。

{su/·r} /suar/ 「yosu·ar<道理により>」 {yo/su/·r}← {bu·}/bua/と比較せよ  
{ri/·u} /riu/ 「č'eri·udun<軍の>」 {č'e/ri/·u/dun}

5 文字のもの。(全て分かち書き)

{beo/·e} /böe/ 「bö·esu<ないならば>」 {beo/·e/su}

連書と分かち書きとが音声上の差異に基づくものでないことは次の例から明らかである。

/yabuasu/ 「yabu·asu<行くなれば>」 {y/bu·/su} ←/bua/が連書

/böesü/ 「bö·esu<あるならば>」 {beo/·e/su} ←/böe/が分かち書き

「·asu」と「·esu」は「条件」を示す接辞であって、同じ語の母音調和による異形に過ぎないから、連書されるか否かによって「·」の部分に音声的な差異を求めるのは合理的ではない。綴りが長くなれば分ける、という程度の習慣であったと考えたい。

要するに、(c)においても分かち書きは正書法上の理由によるものであり、(a)～(c)の全てを二重母音(あるいは切れ目のない母音連続)と見なして差し支えないことになる。したがって、照那斯図(1989)が「·」をゼロ声母と認めながらも、「“·”与前面字母的连写与否,在八思巴字拼写法里,直接反映了蒙古语某些複元音和長元音形成發展過程中的不同状态」として、連書と分かち書きとの間に音声上の差異を求めようとするのには賛成できない。

以上によって、パスパ文字「·(𐰣)」の性格が明白になったものと信じる。この文字は中期モンゴル語における長母音ならびに二重母音を表記するために用いられたものであって、母音の切れ目を殊更に示すものでもなければ、まして弱摩擦音の存在を示唆するものでもない。チベット文字の特徴を受け継いだパスパ文字にあっては、裸の母音を2つ連ねることができないという表記の構造上、音価ゼロの文字「·(𐰣)」が必要とされたのである。

#### 4. ウイグル文字「-ɣ2-」の解釈

Poppe(1954)では、蒙古文語(いわゆる古典期文語)は語頭の \*p ないし \*f が消失したことを除けば、古代モンゴル語の特徴をことごとく保存しているとされており、我々の「-ɣ2-」も古代モンゴル語の特徴を反映する表記と見なされている。このような見方はウラジミルツォフ以来の伝統であろうが、現在でもなお影響力を失ったとは言えない。

しかし一般論として、ある文字の表記体系が、その文字が作られる以前の言語の特徴を残すということが、いかにして可能なのであろうか。その意味で、服部(1939)の「私は、如何なる書写語の形であろうとも、その実証される年代(できればその文献の書き手が如何なる方言を話したかをも明らかにする)と関係づけて考えてみて、初めて意義を持つものと思う。年代を問題外において書写語の形を引用することは、その形と現代のある方言における形との対応を問題にしているだけならばともかくも、進化の観点をそこに導入するときは誤謬を犯す原因となり得る。」という表明に全面的な賛意を示すものである。

したがって、ウイグル文字モンゴル語が大体において13世紀の口語に基礎を置いたものであるという服部(1939)の見解も、全く正当であると考えられる。ただし、服部氏は「-ɣ2-」が弱摩擦音を表したものと考え、パスパ文字表記もそれを支持する資料と見なしたわけであるが、私は、パスパ文字の「·(𐰣)」が音価ゼロの文字であるという結論からの論理的帰結として、「-ɣ2-」もその音価はゼロであったと考える。つまり、パスパ文字モンゴル語において「·(𐰣)」が果たしていたのと同じ役割を、ウイグル文字モンゴル語では「-ɣ2-」が担ったのではないかというこ

とである。

もともとウイグル文字はモンゴル語の表記には全く不向きな文字である。母音を表記しないセムのアルファベットに起源をもつこの文字によって、13世紀モンゴル語の豊富な長母音や二重母音を表記することは、本来ならば不可能なはずであった。それが曲がりなりにも可能になったのは、私の考えでは、新たに二つの表記法を採用したからである。その第1は、母音を全て表記する原則を立てたこと。そして第2が、長母音や二重母音の表記をゼロ子音「-γ2-」の使用によって成し遂げたことである。

第1の原則はウイグル語の表記において完全にはなされていなかったのを、モンゴル語において確固たる方針としたもの。そのため、例えば「tngri」「jrlγ」などは、まさにその綴りによってウイグル語からの借用と知れるわけである。この第1の原則を守りつつ、豊富な長母音や二重母音を表記するにはゼロ子音の文字を用いるという発想が不可避（あるいは最善）のものであったと思われる。全ての母音字を連続して綴ることは、ただでさえ1字多音という性質を持つこの文字体系をさらなる混乱へと導くだけである。とりわけ、「-aa-」「-ee-」「-ua-」等は特定の子音字と同形になってしまう。そこで、母音間にゼロ子音「-γ2-」を用いる表記法を追加したことによって、長母音・二重母音の安定した表記が可能になった。

結果として、有声と無声の破裂音という2つの音価を有していた文字にゼロの意味をも担わせることになったのであるが、もともと1字多音の表記体系を持ち、中には4種の音価を持つ文字もあるほどであるから、「-γ2-」の採用は特に大きな負担にはならなかったと思われる。ゼロ子音としてなぜ「-γ2-」が選ばれたかについては定かでない。ウイグル語の表記法の中にすでに何らかのヒントがあったのかも知れないし、別のきっかけがあったのかも知れない。あるいは、「-aa-」と「-ee-」など男性母音と女性母音を区別するのに有効と判断された結果だったとも考えられる。

「-γ2-」がゼロ子音であったという解釈が認められるならば、ウラジミルツォフやポッペによって、最も古風な特徴と考えられた「-γ2-」の表記法は、その予想に反して、当時の発音を忠実に表記しようとした結果の産物であったことになる。換言すれば、いくつかの語彙に方言的要素が含まれるとしても、ウイグル文字モンゴル語はパスパ文字モンゴル語や漢字音訳によるモンゴル語と同質の言語を表記したものであり、種々の文字によって記された当時の主要な資料を、全て中期モンゴル語という枠の中でとらえてよいことになる。

## 5. 文語の音読法

Poppe(1954)および服部(1959)によれば、現代に伝わる蒙古文語には口語とは異なる一定の音読法があり、例えば「ayula」をハルハ人は[ayu:le]のように読むという。この発音は、結果として、服部(1959)で想定された古いモンゴル語の音形に近似しているが、服部氏自身が「この蒙古人の音読法が古い発音を伝承しているのだという保証はない。」と述べている通り、文語の音読法と古代の発音とは異なる次元のものである。

現代の文語の音読法は、おそらく17世紀に一定の表記法が確立して、いわゆる古典期文語が成立した後に生まれたものではないかと想像する。13世紀に[q][g][ゼロ]の3種の音価を有した文字「γ(=q)」は、17世紀の口語では語頭で[χ][g]、母音間で[χ][γ][ゼロ]、音節末で[g~q]と発音されたと思われるが、正書法の整理の段階で、2点を付して有声音「γ」を表記し、無声音「q」と区別するようになった。音節末では有聲・無聲の対立がないために表記としては無

標の「q」のままであった（現行の転写では「γ」とされる）。母音間のゼロも一種の有声という判断で「γ」とされた。それらの表記を外見上の2種類の区別で‘文字通り’に読んだものが、文語の音読法として定着したと考えられる。女性語の場合には有声・無声による文字の区別は行なわれなかったけれども、音読法は男性語に準じたのであろう。

このような音読法は、『蒙語老乞大』など18世紀のハングル文字モンゴル語でも確認できる。「-γ2-」がすべてハングル文字の「g」で表記されているのである。この表記が単に蒙古文語からハングル文字への‘翻字’でないことは、〈人〉を「kun」（文語「kumun」）と表記していることから明らかである。また、同時代の『初学指南』における満洲文字モンゴル語が、〈弟〉を「deo」/deü/（文語「degü」）と記していて口語的であるのに対し、『蒙語老乞大』では「deguu」とあり、文語の音読法に由来するものと判断される。

文語の音読法なるものは、文語と口語の乖離が進んでいけばこそ必要になるものであろう。文字の表記が口語の発音と近い段階では特別な音読法は必要とされない。17世紀にはすでに蒙古文語の綴りは口語とかけ離れたものになっていたため、新表記の確立とともに、しだいに一定の音読法が生まれたものと考えられる。いずれにせよ、文語の音読法もその時代の口語の音韻体系の枠からはみ出るものではなく、すでに失われた古代の発音が文語の音読法の中にのみ存在することはありえない。

## 6. 小結

- ①13世紀においてすでに長母音は存在していた。「bayatur」は13世紀においても2音節であり、第1音節が現代口語と同様に長母音であった。
- ②13世紀には様々な二重母音もあった。ウイグル文字「-γ2-」の部分には何らの子音もなかった。
- ③したがって、現代口語の長母音は13世紀までさかのぼったとしても、長母音ないし二重母音であった。
- ④ウイグル文字「-γ2-」はゼロ子音であり、ウイグル文字モンゴル語はパスパ文字モンゴル語と同様に当時の口語に基づいて記された。
- ⑤現代における文語の音読法は古代の発音を伝えるものではない。

（以下続稿）

## <参考文献>

- Clauson&Yoshitake(1929): *On the phonetic value of the Tibetan characters ཨ and ᠠ and the equivalent characters in the ᠬPhags-pa alphabet*. London(JRAS)
- Ligeti(1961): *Trois notes sur l'écriture 'Phags-pa*. Budapst(Acta Orientalia Hungaricae 13)
- Poppe(1954): *Grammar of Written Mongolian*. Wiesbaden
- Poppe(1957): *The Mongolian Monuments in ᠬP'ags-pa Script*. Wiesbaden.
- 服部四郎(1939)「蒙古語文語の起源について」(『服部四郎論文集』1所収、1986)
- 服部四郎(1959)「蒙古祖語の母音の長さ」(『服部四郎論文集』3所収、1989)
- 照那斯图(1989)「八思巴字中的零声母符号」(『民族語文』1989年第2期)

## 【追記】

本稿はもと 2003 年 11 月 16 日に紙媒体で発行されたものである。今回 PDF 化するにあたって、当時切り貼りで表示していた数種の文字のうち、ウイグル文字部分は削除し、チベット文字とパスパ文字は Windows 標準のものを利用した。また、2 頁に挙げたチベット文字の表記例はもと「a、ā、i、ī、u、ū」であったが、技術的な理由から「da、dā、di、dī、du、dū」に変更した。

もとのファイルはワープロソフト一太郎で作成したものであったが、今回それを Word 文書に変換してから PDF 化したため、レイアウトが元のものとは多少違っている。総ページ数は変わらないが、2 頁以降は 2 行ほどずれており、1 行当たりの文字数も同じでない部分がある。その他、誤記の修正などわずかな部分に手を加えたが論旨に影響はない。（2018 年 8 月 19 日）